

### 哲学と社会貢献

哲学が大切だ。何も、ソクラテス・プラトンから始まって、デカルト・カント・ショーペンハウエル・ヘーゲルを通して、ニーチェ・ハイデカー・フッサールにいたり、ソシュールやメルロポンティまで、西洋の哲学史を歩くこともいつかは大切だが、「なぜ今自分がこの地にいるのか」、「自分とは何か」、「生きるとは何か」、「人はどのように繋がるのか」などの疑問を持ち、その問いかけを行いながら、課題を解決する道筋の付け方や、今の途中経過のあり方や、模索のたどり方などを一つ一つ自分のものにしていくことは、とても必要不可欠なことと思われる。

ともすれば、貨幣経済を優先する価値観と効率と対費用効果を前面に押し出した費用を投資したときの費用回収としての人生のあり方と考え方がともすれば今の時代の考え方の根本になっていると思われがちだが、今の自分たちを考えていく時に、自分の今を構築する構造を知りその構造の課題をあぶり出し、課題解決の道筋をつけることがリスク・マネジメントとしても重要なのである。

昨年のベストセラー『君たちはどう生きるか』(吉野源三郎 原作、羽賀翔一 画)の背景には、スマホ世代においても、哲学を必要としていることを表していると考えられるのではないか。「どう生きるのか」の様々な回答を見つける手立てを構築することが実地体験としても重要視されていると思うのである。

こんな時にこそ、自分の学習の仕方についても、毎日の過ごし方についても、部活動と学習のあり方についても、いつも考えている生徒達の悩みが見えてくる。誰も教えてくれない一つ一つをどのように解決していくのか、正しさは本当に正しいのか、誰に相談していくべきなのかと歩いている姿の背中にその思いがあふれている。

答えは、『哲学しよう』、『対話しよう』、『疑問を投げかけよう』、『教訓に縛られるな』、『自分を信じよう』、『校長と話そう』と生徒達に伝えたい。

生徒達の真摯な問いかけに十分に答える学校や校長でありたいと思います。

きっと、そんなフランクな問いかけが学校の中で行き交うことができはじめたら、それが大きな地域貢献・社会貢献への一歩となり、やがては生徒達がそれをまねて自分たちの地域貢献や社会貢献に進んでいくのではないかと考えています。

